



## 「佐々木さんを支援する会」会報

# ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3 / TEL 045-774-9861洋光台  
バプテスト教会内(蛭川明男牧師) / 世話人代表 金子 敬  
事務局長 吉高 叶(栗ヶ沢バプテスト教会TEL 047-341-9459)

ニャルワングダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

## 巻頭言

**奥田知志**

おくだ ともし

東八幡キリスト教会牧師  
NPO北九州ホームレス支援機構理事長

### 「隣人愛 - 出来ない相談・矛盾としての希望」

「ゆるせんなあー」と思う。「こんな非道はゆるせん」と。そんな事件が相次ぐ。先日は「闇サイト」で知り合った三人の男が金目当てに見ず知らずの女性を拉致し殺害するという事件が起きた。彼らは、相手の人生や家族のことを考えなかったのか。自分の人生を吟味することもないのか。40歳、36歳、32歳「いい歳」をして犯人たちの短絡的で無軌道な行動に愕然とさせられる。

「隣人を愛せ」(マタイ19章)とイエスはおっしゃる。しかし、こんな連中をどうすれば愛せるのか。それは出来ない相談だ。愛されることも赦されることも自ら放棄してしまったかに思える連中に「自業自得だ、滅んでしまえ!」とつい言いたくなる。事件について論じるブログには、「死刑にしろ」「公開処刑を」「粘着テープで巻いてハンマーで叩き殺せ!」などの言葉が並ぶ。「欲望の殺意」が「正義(裁き)の殺意」を生む。しかも、後者は正当化される。・・・しかし、いずれも殺意にほかならない。殺意の連鎖は、底なしの奈落へと私たちを誘う。その時イエスの言葉が響く「隣人を愛せ」。そうなのだ。この連鎖は断ち切らねばならないのだ。

遺族の痛みを知る方がおられる。父なる神である。ひとり子イエスを十字架でなぶり殺されたあの日、全地は暗くなった 遺族の思い。しかし、神はこのイエスの十字架をもって人類に対する赦しと愛を宣言された。「赦せんことを赦す」。赦しとは出来ない相談に乗ることに他ならない。

「自分を愛するように隣人を愛せよ」。自己愛を手本にせよということではないだろう。それは「自分が愛され赦されたこと。この現実を踏まえよ」ということだと思ふ。キリスト者は、イエスを十字架に架けたのは自分だと告白する。その自分を父なる神が赦し愛されたならば、あなたたちもそうすべきだとイエスはおっしゃる。隣人愛とは、私たちに向けられた神の愛を意味する。律法ではない。よって隣人愛は神のものであって私たちのものではない。私の中を探ってみても隣人愛など出てこない。そこには「赦せん」という殺意の連鎖があるのみだ。敵を愛することも、隣人を愛することも、父なる神とイエス・キリストによって示された。私たちが、本音を脇に置き自分に向けられた神の愛に生かされていると告白する時、出来ない相談への希望

が与えられる。

真の希望は、どこから来るのか。「犯人を八つ裂きしたい」被害者もしくは遺族の経験から導き出されるこのような「望み」は事実から導き出された故に説得力をもつ。しかし、それは私たちの現実を凌駕する真の希望とはなり得ない。私たちが、元来否定すべき悲惨な事件の延長線上に「希望」を見出そうとするのなら、それは全く見当違いなのである。神学者のモルトマンが希望についてこのように語っている。「しかし、希望の約束の命題は、現在経験している現実との矛盾を来たらせることがしばしばです。それ（希望）は、なされた経験からの結果として出てくるのではなく、新しい経験へと招き入れます。その新しい経験は、すでにそこにある現実を照らそうとするのではなく、来るべき多くの可能性を探り出そうとします。それは、他のすべての現実の認識のように、裾をもって後からついて行こうとするのではなく、松明を

持って先立って行こうとします」（「終わりの中にはじまりが」より）。私たちの経験からは希望は生まれません。希望は経験と矛盾する。希望は、私たちを新しい経験へと招き入れるのだ。「赦すことなどできない相談」。確かにそう言うしかない現実がある。だが、それでも希望があるならば、それは現実感覚との矛盾の中にこそ生まれる。「惨殺されたから殺す」は、私たちの現実と矛盾しない故に大変わかりやすい。しかし、希望は私たちの経験の延長線上にはないのだ。真の希望は、現実との矛盾としてのみ希望足り得る。

和解も然り。それは出来ない相談に乗ることだろうし、矛盾に満ちた作業であらざるを得ない。なぜならイエス・キリストの十字架と復活がまさにそうだったからだ。ここに希望があると信じる。だから出来ない相談から逃げださないでいたいと思う。佐々木さんたちのルワンダでの和解の働きを覚えて祈りたい。

## 佐々木和之

ささきかずゆき

## 破壊した家を、再び建てること

受刑者たちにとって、このプロジェクトは償いの機会です。しかし、それだけでなく、彼らの心の深い傷を癒やし、彼らの人間性と尊厳を回復するプロセスでもあるのです。

### ■ムラーホ! アマクル? (お元気ですか?)

日本は今紅葉の美しい季節ですね。紅葉と無縁のルワンダは、9月末から始まった大雨期の真っ最中です。キガリでは一日おきくらいに激しい雨が降るのですが、そんな時に困るのが、自宅や事務所の窓と窓枠の間から雨水が入り込み、床が水浸しになることです。ですから、この時期、床の上には塗れて困る物を置くことが出来ません。

実は、前回のウプム工No.8を皆さまにお届けした直後、私たちにとって重大事件が発生しました。健康診断のために子どもたちを連れて帰国していた妻の恵に乳癌が発覚、手術

を受けることになったのでした。私も急遽手術の前々に帰国しました。詳しいことは恵の報告(6~7頁)の通りですが、手術は成功し、2週間後に退院してからは、鹿児島の実家で療養しています。仁(中2)と共喜(小5)は、9月から地元の公立校に受け入れていただき、日本での学校生活を送っています。私と萌(高1)は、手術の約3週間後にルワンダに戻り、父と娘二人きりの生活を、今のところ大きな「衝突」もなく過ごしています。恵はすっかり回復し、今は普段通りの生活をしています。そして、特別な治療は必要なしとの主治医の先生の判断をいただき、

12月の初旬に検査を受けてからルワンダに戻って来られることになりました。

乳癌発覚を知らされた時には、どうなることかと思いましたが、神様がこのように私たちにとってこれ以上望みようがないほどの結果を与えて下さいました。この間、多くの皆さまにお祈りいただくとともに、お励ましのお手紙・お電話、お見舞いをいただきました。恵はもちろんのこと、家族皆が大変励まされました。ありがとうございました。

### 「償いのプロジェクト」最新情報

ジェノサイドに関与した罪を自白・謝罪した受刑者たちが、協力してジェノサイドの生存者や地域の特に貧しい人々のために家を建て上げる「償いのプロジェクト」の最新情報をお伝えします。このプロジェクトの必要経費は、皆さまからの支援金で賄われています。今年度に建設が計画されている25棟のうち、4棟（住居 - 料理小屋 - 屋外トイレのセット×4）が既に完成し、現在他の4棟の建設が進んでいます。当初の計画では現時点で10棟が完成している予定でしたので、かなり工期が遅れています。しかし、10月下旬に66名の受刑者が新たに加わり、それまでの64名体制から130名体制（男性125名、女性5名）に変わりましたので、今後は住居建設が加速されることでしょう。



完成した家

「プロジェクトを始めて良かった」とつくづく思われるのは、たとえ小さな支援であっても、それが本当に必要とされている人々のもとに届けられていることを見る時です。

ジェノサイド生存者のための住居建設は、政府にとっても最優先課題ということになっています。そのための基金も設立されているのです。しかし、今プロジェクトの現場を訪ねて感じるの、その政府の支援が、最も貧しい人々、権力から遠い人々に届いていないのではないかということです。

先日、まだ工事が始まったばかりの建設現場を訪ねた時のことです。そこには、バナナの樹皮で組み立てられた、高さ1.5メートル、幅1メートル、奥行き2メートルにも満たないそれは粗末な小屋がありました。いかにも雨漏りがしそうなその小屋に、受益者の女性であるマダリナさん、彼女の年老いた母、そして娘が寝泊りしているとのことでした。マダリナさんの「雨露をしのぐ場所が欲しい」との嘆願に応え、より短期間で完成する料理小屋の建設をさき回しにすることにしました。そして、今、マダリナさん一家は、住居より先に完成したその料理小屋で寝泊りをしています。



●建設が進む家の前でマダリナさんと

### ■受刑者のためのセミナーで学んだこと

新たにプロジェクトに参加する受刑者のために、10月15日から17日の3日間、地元の教会を会場にして、修復的正義（restorative justice - 修復的司法とも訳される。ウブム工No.8参照）をテーマにしたセミナーを、REACHの同僚のフィデルさん、そして、プロジェクトの調整員として働くオグスティンさんとともに実施しました。参加者は女性2名、男性68名の計70名（既にプロジェクトに参加していた4名を含む）。プロジェクト

の調整役としてボランティアで働いて下さる地元のキリスト教諸教派の代表者8名にも参加していただきました。

セミナーの目的は、プロジェクトの意義を修復的正義の観点から受刑者の人たちに理解してもらうことでした。また、セミナーのテーマとして掲げた聖書の箇所、エゼキエル書33章14から16節に記されている恵みの言葉について学び語り合う時でもありました。セミナーの方法や内容は、これまで実施したものと同様でしたが(ウプムエNo.6、No.7参照)、新しい試みとして、プロジェクトに参加してきた2名の受刑者を招き、家作りに取り組んでみて感じていることを率直に話してもらう時間を組み入れました。

また、今回もジェノサイド生存者の女性たちを招き、彼女たちがジェノサイドを生き残り、歩んできた道のりについて、また、彼女たちの癒しと回復の助けとなる事柄について話しを聴きました。お招きした2人の女性のひとり、ユディトさんは、加害者の証言をもとに掘り起こされた、近親者11名の亡骸を今年の4月に埋葬したばかりの方ですが(ウプムエNo.6及びNo.8参照)、イエス・キリストへの信仰によって支えられ、以前は自分の心を埋め尽くしていた憎しみから解放されたことについて証言されました。そして、住居建設の受益者でもある彼女は、自分の家を建てるために働いている受刑者たちに度々昼食を提供していると話したのです。彼女の話の後に持たれた休憩時間には、何人ものセミナー参加者が彼女に握手を求めていました。

テーマとして掲げたエゼキエル書において、神様は、どんな悪人であれ「過ちから立ち帰って正義と恵みの業を行うなら、すなわち、…奪ったものを償い、命の掟に従って歩き、不正を行わないなら、彼は必ず生きる」と言われます。そればかりか、驚くべきことに「彼の犯したすべての過ちは思い起こされ」ないとまで言われるのです。虐殺加害者としての恥辱を負って生きてきた多くの参加者たちは、この言葉をどのように受け止めたのでしょうか。私は、少なからぬ参加者がこの言葉に心を打たれたように思います。

今回のセミナーでも、受刑者たちが心に深い傷を負っていることが明らかになりました。初日に彼・彼女らの悩みや苦しみについて分かち合う時間を持ったのですが、今回も涙ながらにジェノサイド当時の体験を告白している参加者を目にしました。二日目の朝には、牧師でもあるプロジェクト調整員のオグスティンさんが説教をした後に、「心に傷を負っている人、その傷から癒されたいと思っている人がいれば前に出てきて下さい。皆さんのためにお祈りしたいと思います」と語りかけました。すると、20名近くの参加者がその呼びかけに応え、会場の前に歩み出ました。そして、彼・彼女らを囲むようにしながら、地域の牧師たちが順番に祈ったのです。

もう一つ、セミナーを進める中で、多くの受刑者たちが、科せられている労働奉仕刑を自らの尊厳を回復するための機会として捉えていることが明らかになりました。私は前号で、「破壊した家を、自らの手で再び建て上げていくこと。それは、彼・彼女らが自らの人間性を回復し、尊厳を取り戻していくプロセスである」と書きました。今回それが決して私の思い込みではなく、受刑者自身がそう考えていることを確認しました。セミナーの後半、プロジェクトの意義について話し合う中で「これをやり遂げて尊厳を取り戻すんだ」といった発言が何度となくなされました。そして、科せられている労働奉仕刑を単なる



### セミナーで共に祈る

刑罰として捉えるのではなく、神様から与えられた償いの機会として捉えよう。それをやり遂げていくなかで、自らの尊厳を回復していこうとの話し合いが持たれたのです。

## ■アナスターゼさんのこと

今回のセミナーで一つとても嬉しいハプニングがありました。アナスターゼさんという、プロジェクトに参加している女性のことを覚えておられるでしょうか（ウブムエNo.7参照）。彼女は、ジェノサイドの当時、ツチ系住民の皆殺しのために他の村から押しかけて来た人々に、彼女の村で誰がツチであるかを教えたために有罪判決を受けた女性です。昨年釈放されるまでの6年5ヶ月を刑務所で過ごした後、今年5月からプロジェクトに参加しています。その彼女が、セミナーの3日目に会場に現れたのでした。

私はてっきり、彼女が誰かに招かれて来たのだと思ったのですが、そうではありませんでした。ちょうどその1週間ほど前、私は彼女が体調を崩して作業を休んでいると聞き、お見舞いのために彼女の自宅を訪ねました。そのお礼を言うために、自宅から3時間以上歩いて会場まで来てくれたのでした。せっかくなので、彼女にもプロジェクトに参加しての感想を皆の前で語ってもらうことにしました。その中で彼女は私の見舞いのことに触れ、「それまでREACHは、ジェノサイド生存者のためにだけ働いている団体だと思っていたけれど、私たち受刑者のことにも心を配ってくれていることが分かりました。そんな団体が今までどこにあったのでしょうか？」と参加者に語りかけたのでした。



### ●バスケットを贈られる●

そして、感謝の印として手作りバスケットをプレゼントしてくれました。私は、私の小さな心遣いを、とても意味のあるものとして下さった神様に感謝しました。私たちと受刑者たちとの信頼関係構築の上で、彼女が語っ

てくれたこの言葉は、測り知れないほど重要な意味を持つ言葉なのです。

### 困難を乗り越えて

患の乳癌が発覚したのとちょうど同じころ、「償いのプロジェクト」も試練のときを迎えていました。労働奉仕刑の監督官庁からいくつかの難題を突きつけられたのでした。それは、家作りに参加する受刑者の労賃を政府に支払う、受刑者が宿営するキャンプを設置し、そこから建設現場に通わせるようにする、受益者各自が所有する土地に家屋を一つずつ作るのではなく、集団居住区の建設に切り替える、より強度かつコストの高い住居の建設に変更する（農村地域の大多数の人々が住んでいる日干しレンガを組み立てた上に泥を塗り固めた家から、泥の代わりにセメントで外壁と内壁を塗り固めた家への変更）との要求です。

プロジェクトの実施方法や内容については、5月に提出した実施計画書が政府に承認されていたため、私たちにとってはびっくり仰天の出来事でした。しかも、仮に実施計画策定の時点で打診されていたとしても、とても飲むことの出来ない要求がほとんどです。一時期、プロジェクトの中断という最悪の事態になる可能性もありましたが、粘り強い交渉の末、要求の について受け入れることで、受益者が所有する土地に受刑者が自宅から通って住居を建設するという、プロジェクトの基本方針を堅持することが出来ました。

要求の を受け入れたこと、また、セメントなどの建設資材が高騰したため（セメント代は、約50%上昇）、建設費予算を組み直す必要に迫られました。が、「支援する会」の世話人の方々との協議の末に承認していただくことが出来ました。

### 終わりに

「支援する会」を結成していただいてから3年、ルワンダに赴任してから2年が過ぎました。これまで皆さまからいただいていたお祈りとご支援を心から感謝申し上げます。これからルワンダの人々の和解への歩みに関わ

り続けていきたいと願っていますので、どうか今後ともご支援をよろしくお願い申し上げます。今回恵の手術という、私たちにとっては大きな出来事を通し、自分たちの願いどおり、計画通りというわけにはいかないものだとつくづく思われました。これからも、様々な困難に直面していくことと思いますが、この働きが神様のみこころにかなったものであるかぎり、どんな形であれ決して閉ざされ

ることは無いとの希望が与えられています。

それでは、少し早いですが、ノヘリ・ズィザ！ どうか良いクリスマスをお迎え下さい。皆様が恵みと愛に満たされたクリスマスを迎えられますように、そして、新しい年の皆さまの歩みの上に神様の導きと祝福が豊かにありますようにお祈りいたします。

(11月8日記)

## 祈りに囲まれた実感

佐々木 恵

ささきめぐみ

主が共にいて下さる恵み、全てを備えていて下さる恵みを改めて知り、これからも主に信頼しつつ歩んでいきたいと思えます。

7月末に約1年7ヶ月ぶりに、3人の子どもたちと一緒に日本に帰国しました。9月の中旬にはルワンダに帰る予定だったのですが、思いがけず4ヶ月以上の滞在になりました。8月31日に、左乳房を摘出する乳癌の手術を受けたのです。そもそも今回の日本への帰国は、健康診断が第一の目的ではあったのですが、こんなことになるとは思っていませんでした。しかし、今回の経験でたくさんの恵みをいただきました。今回はその証をさせていただきます。

まず主は、臆病な私の一番近いところに、とても心強い助け手を備えていて下さいました。去年の2月に同じ病院で乳がんの手術を受けていた母が、「何も心配することはない。あそこの病院は先生に信頼して任せられるんだから！」と力強く励ましてくれたのでした。「私が癌と知ったら、母はどんなに落ち込むだろう。」と心配していたのですが、その私を、母が反対に勇気づけ力づけてくれたのです。母の存在は私にとって本当に大きな支えでした。

次に、とても有難かったのは、この鹿児島

の地に日本でも有名な乳腺科の病院があったということです。このこと自体、なんという大きな主の備えだったことでしょうか。また主は、入院中も、同じ日に手術を受けた2人の友を助け手として備えていて下さいました。入院中、彼女らの存在は、慰めあい、支えあい、励ましあえるとても大きな存在でした。

また入院中、私は自分でも不思議なくらい元気でした。気分はいつも明るく前向きで、手術のために平らになってしまった左胸も自然に受け止めることができました。普段私は、自分の体のことになるととても心配性で、悪いことばかり考えてしまうのですが、この時ばかりは、悪い結果になることをどうしても想像できなかったのです。それでも術後の2週間後に出る、摘出した組織の検査結果はとても気がかりでした。その結果によって、その後の治療方針が決まるからです。

私たち入院患者が一番恐れていたのは抗癌剤の治療でした。副作用による頭髮の脱毛が何より私たちを不安にしていました。結局、私の検査結果は、他のリンパへの転移もなく、とてもおとなしい癌で再発のリスクも低いということでした。心配していた抗癌剤につい

ては、主治医と相談した結果、受けなくてもよいということになりました。結果を聞いた翌日には即退院。帰国してくれていた夫・和之も一緒に、彼が日本を発つまでの4日間、家族そろっての時間を共に過ごすことができましたのでした。

ところで2人の息子は、私の入院・療養中、実家の近くの学校に通うことになったのですが、2年前に帰国した折に1学期間学校に通ったこともあり、そのときの友人もいて、スムーズに学校生活に溶け込むことができました。このことも2年前から神様が備えてくださったのだと気づいたのです。私と一緒に帰国していた長女の萌は、夫の和之と一緒にルワンダに帰りました。今は、ルワンダと鹿児島に家族が離れて暮らしていますが、離れていても祈りあえることの恵みを感謝しています。

さて、入院中には本当にたくさんの方々からのお見舞いとお祈りをいただきました。そしてそのことにより、大きな力をいただきました。カードに書かれた聖書のみことばにどれほど励まされたことでしょうか。そしてまた、信仰の先達からいただいたメッセージにいかにも慰められたことでしょうか。いくつか紹介します。「すべてが主のみことばと信じ、ゆだね、祈ります。」「癒しの主、助け主であられる主が、いつもいつも恵さんと共にいて下さることを信じ、感謝です。」「主がゆだねられたわがが、ルワンダでご夫妻を待っています。主は手術の先にそこへの道を整えてくださると信じ祈っています。」

どんな状況にあっても、主にゆだねて祈って下さる方々がいること、また、主が共にいて下さることを共に信じられる信仰の友がいるということ、分かち合えるみことばがあるということは、クリスチャンにとって大きな力・恵みです。しかし、私たちは、困難の中にある人に、「神様のみことばです。」とか、「感謝です。」とかは、なかなか言えないのではないのでしょうか。私自身、そのような者の一人です。しかし、イエス様の愛を本

当に知る人は、こうして、主のみことばを信じ、ゆだね、共にいて下さる主に感謝できるのです。信仰の先達からいただいたカードを通し、その方々の信仰によって、主が共にいて下さる恵み、主が全てを備えていて下さる恵みを改めて知ることができました。そして、この先達に習って、私もまた、主に信頼しつつ、聖書の言葉、信仰の言葉を分かち合う者になりたいと、深く思わされました。

皆様からいただいたお祈り・お見舞いにこの場を借りて改めて御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。私と息子2人は、12月12日に日本を発ち、クリスマスは家族そろってルワンダで迎えることになりました。どうぞ、これからも、私たちのこと、ルワンダのことを覚えてお祈りください。

(11月2日記)

#### ＜佐々木ファミリー祈りのリクエスト＞

- \*REACHの全ての活動が人々の癒しと和解に資するものになるように。
- \*支援体制拡充のためにアメリカ訪問中のカリサ師（REACH代表）のために。
- \*恵の手術の成功と回復に感謝。これからも健康が支えられるように。
- \*仁と共喜の日本での貴重な体験・学校生活に感謝。
- \*恵・仁・共喜のルワンダへの旅の安全のために。
- \*和之と萌の健康と安全のために。

# 関東学院小学校 ルワンダ展のご紹介

関東学院小学校の皆さんが、私たちやREACHとの交流を通してルワンダについて学んだこと・考えたことを「ルワンダ展」として発表されます。首都圏にお住まいの方はどうぞ足をお運び下さい。

## 第1回 関東学院小学校 ルワンダ展 「平和を目指す国・ルワンダ」

期間：2007年11月12日(月)～12月22日(土)

平日：10時～20時 土曜日 10時～16時 日曜・祝日休館

会場：KGU関内メディアセンター( JR関内駅から徒歩5分)

問い合わせ 関東学院小学校：045(241)2634

または KGU関内メディアセンター：045(650)1131

## 事務局より

新たに入会してくださった方々です

2007年7月16日～10月1日

加藤英理子、小林孝男、青柳清孝、奥村敏夫、岩永恵子、川口寛子、山川節、  
目白ヶ丘教会教会学校小学科、足立愛湖、飯田嘉美代 敬称略

ありがとうございました!!

## 佐々木さんへの支援感謝と継続のお願い

今年もクリスマスの便りが聞かれる季節となってまいりました。皆さま、いかがお過ごしでしょうか。ルワンダ大虐殺から13年の歳月が過ぎ、和解と癒しを掲げる現地NGO“REACH”で働く佐々木和之さんとご家族を支えることを目的として立ち上げた「佐々木さんを支援する会」の働きも初期の3年を経過し、佐々木さんが中心になって立ち上げた「償いのプロジェクト」も具体的な活動となって動き始めています(ウブムエ 8、9参照)。既にウブムエ 6、7でお知らせしましたように、世話人会ではプロジェクト運営費に関しても、その一部を支援することを決定しましたが、これもひとえに皆さま方の御協力と御支援の賜物と厚く御礼申し上げます。

わたしたちは、現地での働きが軌道に乗っていることを喜びとし、今後も佐々木さんが推進する「償いのプロジェクト」の支援を継続して行こうと願っています。つきましては、皆さまにおかれましても、これからも佐々木さんの働きを覚えて、厚い支援をお願い申し上げます。当初、3年間を目処にお願いいたしました、この働きが軌道に乗っている現在、引き続き(再び3年間を目処に)御支援を賜ればと、お願い申し上げる次第です。

会員の皆さまには継続の申込み書を別途送らせていただきました。ウブムエ誌でのお願いと重なりますが、何とぞよろしくお願い申し上げます。下記の口座をお使いいただく方法に加え、「郵便自動引き落とし」をご利用いただけます。ご連絡いただければ、所定の申込用紙を送らせていただきます。洋光台教会・蛭川までご連絡ください。(電話045-774-9861)

郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会

世話人会 金子 敬(古賀教会牧師)、蛭川明男(洋光台教会牧師)、  
村上千代(日本バプテスト女性連合幹事)、吉高 叶(栗ヶ沢教会牧師)